

翻刻 西国追善集

井上, 敏幸

大内, 初夫

<https://doi.org/10.15017/12200>

出版情報 : 語文研究. 30, pp.41-50, 1971-03-31. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

翻刻 西国追善集

井・上 敏 幸
大 内 初 夫

解 説

地方における西鶴門下の有力俳人であり、はた九州談林派の雄である中村西国の追善集は、これまで全く知られず、わずかに七回忌の折に娘西女が詠んだ「兄弟の顔見合せてくるなかな」（漆川）と、二十五回忌に「同郷の後輩坂本朱拙が詠んだ」志こころごとくの窪にもる清水かな（芭蕉監）の二句の追善句が知られるにすぎなかった。西国は地方俳人としては珍らしく華々しい撰集活動を展開し、地元後進にも大きな影響を与えたりと考えられるだけに、この点何かものたりないものがあつた。しかるに昨年、中村幸彦先生によって日田市豆田魚丁の広瀬宗家の蔵書の調査が行なわれた際、同家文庫の中からここに新しく紹介する西国追善集が発見されたのである。

この追善集についてまず書誌的なことを述べれば、写本一冊、本の大きさは縦二五センチ、横一七・六センチで、用紙として厚手の和紙を用いているが、表紙を逸し、さらに腐蝕等で初めの数丁を失つていて、現存部分は二十丁である。なお一丁表の

中ほどに「広瀬氏本家」の朱印がある。本集の写者・筆写年時等について定かでないが、或いは成立年時頃まで溯りうるものであろうか。

さて、本集は右のごとく表紙や序文等を失つているために、原題名が不明である。「西国追善集」は発見者中村先生が広瀬文庫の目録に採用された仮題であつて、今翻刻に當つてこれに従つた。この題名によつて明らかごとく、本集は、元祿八年六月六日に死去した豊後日田豆田町（現大分県日田市豆田町）住の談林俳人中村西国、通称島屋庄兵衛の追善集として編まれたものである。成立年時は、一丁表の「元祿八亥年季秋上浣」の日付と巻末追善句に「百ヶ日」の俳諧が見えることから、西国の百ヶ日を迎えて間もない頃、すなわち元祿八年九月中の成立と推量して大体間違いないであろう。それから本集の編者についても不明である。おそらく同郷の西国の門下生の手になるものとすれば、巻末追善句に名をたらねた俳人のうち、里仙・朱拙、或いは西国高弟といわれる鶴立などが擬せられようが、これについてはいづれ後考を俟ちたい。

ところで本集の内容は、まず西国末期の折の句や賢巖の偈を取め、ついで「山家題」の西国の文章や江戸興行等の連句をおき、終わりに諸家の追善句を並べるといふ構成をとっている。

西国臨終前後の様子などが或いは書かれていたのではないかとと思われる初めの部分数丁を逸しているため、そうしたことについて殆ど何も知れないのは遺憾であるが、それでも西国末期の吟と見られる「山にうたれて」の句や、白杵の僧山菴賢巖との深交を知りえたことは有難い。白杵には藩主ゆかりの臨濟宗妙心寺派の寺に月桂寺・多福寺の両寺があり、賢巖はそのいずれかと関係があるのではないかと考えられるが、それらについて調査する余裕なく、これも後日を期したい。ついでながら西国の法号と忌日については、小国奴留湯家蔵の過去帳に「元禄八年亥六月六日 釈ト幽」、日田市財津町中村家墓地の墓碑銘に「大円ト幽鏡智」「元禄八巳亥六月六日」とある。行年については「豊西俳諧古哲伝草稿」（以下「古哲伝草稿」と略称する）に四十九才と見えていたが、ここにより確実な資料を得たわけである。それから西国終焉の場所については、「龜山鈔」には、一子を養子に遣わしていた肥後小国宮の原の兵庫屋（奴留湯家）にて終られしよしと記し、禿迷慮氏著「小国郷史」も「宮原で歿し、内牧の道智寺で印導を授け、法号は大円ト幽鏡智とおくられ云々」という。さすれば「白杵賢巖の尋ね侍りて」というのは小国でのことであろうか。

「江戸興行」と題した連句等の一連の作品は、「古哲伝草稿」に「元禄四辛未年、松平大和守直矩の君を慕ひ奉り、直矩は其先日田山の城主たり、東都に趣く。六月廿三日、東武着。溜池の御館に其縁による也。

伺公して、則此たちに居事久し。其間紀州公を始奉り、長門萩侯其外諸侯へ召れ云々」と見える江戸旅行の折のもので、この時の逗留は翌五年十二月十六日までの一年有半におよぶ長期のものであった。本追善集所引の「我としや」の巻は同書によれば元禄五年二月十九日露沾邸における興行「霜踏や」の巻は元禄四年十二月九日同じく露沾邸での興行であり、作品の一部は「古哲伝草稿」「龜山鈔」に引かれて既に知られているものである。「古哲伝草稿」は他に京極駒角侯に召されて興行した百韻の一部等をも掲出しており、それらは共に今日伝存不明の西国著「江戸日記」からの引用によると推測される。この追善集に露沾邸興行の二巻のみを掲出したのは、一座した連衆の顔触れが談林・蕉風にわたって知名な俳人を交えた多彩なものであることによるであろうが、そうした俳席で第三や発句を西国がつとめていることによつても、彼が西鶴門下の俳人としての声望や才腕を買われて旅先の江戸で厚く遇されたことが知られる。

なお少異があるが「我としや」の巻は終わりの「十日まで」の句まで「古哲伝草稿」に見えるが、「霜踏や」の巻は同書に表六句までしか引用されていず、本追善集の出現によつて歌仙全句がここに明らかになった。そのあとの発句のうち「千代御池」「元の祿に」の二句は、大阪市立大学森文庫所蔵の写本「見聞集」にも見えるもの（永野仁氏所報）。因みに同書は永野氏によれば書写年代は不明で、季吟・湖春・可全・幽山・安適等の歌や句を録しているという。「日の出で」「其魂や」の二句は「古哲伝草稿」に引かれていて、元禄五年の詠であり、この剃髪の折に松平大和守からト幽の道号をいただいており、既に市中の町

宅にいたらしい。

「鶴が岡にて敬吟」と前書した「色垣や」の句は、元祿四年江戸下向（六月二十三日江戸巻）の往路鎌倉に遊んでの吟であろう。元祿五年十二月十六日江戸を出立した帰路では季があわない。なお右の江戸出發日は「古哲伝草稿」の記録によるが、日田に帰郷した時は「蒿の黄ばミ云々」という秋の候であるから、途中各地に杖を止めて数か月を費したことになる。もちろん帰郷記念の「ねち替て」の独吟歌仙も今回新しく知られた作品で、西国のもとしては現在知られる唯一の独吟俳諧ということになろう。

それから十二丁裏「山簞て」以下の西国の発句は、後述のごとく「昼見れば」の一句を除き、すべて新出のものである。そのうち大半が肥後に遊んでの吟であるが、これも現存不明の西国著「肥後再遊記」から抜いたものではなからうか。又そのうち人に乞われて詠んだ賛句がいくらかあり、終わりに「畫讀」の句四句を並べているが、彼は「狩野派の画を能せり云々」と「亀山鈔」に見えるごとく、画に基だ堪能であり、「雲くらひ」中には自賛入りの画を多く掲出している。ところで「昼見れば」は徒のむしぞかし」の句について「古哲伝草稿」には、江戸滞在中西国は、芭蕉の世評が高いので深川の草庵に訪ねたが、芭蕉は折節閑閑中のごとて会ってくれずに空しく帰り、その後門人に「ばせを流唯安き事なり」と語って詠んだ句と記されている。かつて山崎藤吉氏はその著書に「俳人芭蕉」「芭蕉全伝」西国の「江戸記」からとして右の芭蕉訪問の話を用いし、芭蕉閑閑年時を元祿五年秋と推定する有力な根拠とされたので

あるが、閑閑が元祿六年秋のことと確定された今日、かえってこの話の信憑性が疑われるのであって、多分「昼見れば」の画賛句から反対に創作された話ではなからうか。

終わりの二十数句の追善句の作者の顔触れには、中央知名の人士は全く認められない。その殆んどが同郷近隣の俳人で、おそらく西国の指導下にあった門弟またはそれに近い人々であろう。そのうち杉林庵里仙は日田友田村の住、武内氏（李千とも号する）。元祿十一年来遊の支考をその亭に迎え、支考に「香爐庵記」の作があつたことは「梟日記」に明らかであり、後年蕉門として活躍している。朱拙は同じく城内村の住、坂本氏、元祿十年以降「梅桜」「おくれ馳」「今日の昔」等の撰集を相ついで刊行し、九州蕉門の先達としての位置を占める。宗之は「梅桜」に入集しているが通称等不明。田間氏鶴立は西国門下の先輩格の人で、「水仙畑」なる撰集を刊行したという（未発見。「亀山鈔」による。「古哲伝草稿」には「幽仙畑」とする）。朱拙・菊人との三吟歌仙が「梅桜」に入集している。その他の俳人についてはつまびらかでないが、これらの追善句には師を悼む真情があふれていて、親密な師弟関係を想わせるものが多い。なお西国によって長年培われたこうした地盤があつたればこそ、西国死没の五六か月あと、元祿八年冬に蕉門行脚鳥落人惟然坊が日田の里を訪れた折、惟然の説く「寂あり花ある」おくれ馳序）蕉風俳諧に、いちちはやく朱拙・里仙等の人びとが傾倒し、他地方に先駆けて蕉門俳壇が形成され、元祿十年には蕉門俳書「梅桜」が朱拙によって編集上梓されたし、翌十一年来遊の支考が「連衆十六人をのこの筋のほひふかく、吾門の風流この地に楽しむべし」

(梟日記)と述べたごとき盛況をもたらしたのであった。

以上長々と駄文をつらねたが、本追善集は、単に俳人西国研究の第一資料としてのみならず、元祿江戸俳壇および蕉風化前夜の日田俳壇等を研究する上でも大切な資料であることはいうまでもない。終わりに本誌に紹介・翻刻を許された所蔵者広瀬正雄氏ならびに発見者中村幸彦先生、また種々教示を得た永野仁氏・井上敏幸氏に深謝申上げたい(大内)。

翻刻凡例

- 一、原本になるべく忠実に翻刻するようにつとめた。
- 二、漢字の字体もできるかぎり原本に従うようにした。正字体と略字体が混在しているのは原本のままである。但し原本の漢字が行草書体で書かれているものは正字体を用いた。又、異体字は印刷の可能なかぎり原本のままにした。
- 三、前書等の行替えはすべて原本の通りである。
- 四、丁数は現存第一紙を一丁とし、丁数をアラビヤ数字で示し、表裏ごとに「ならびにオ・ウの付号を付した。
- 五、誤字等もみだりに訂正せず、(マ、)の注記を付した。又(一)の部分は破損・虫害等によつて原本の文字不明の箇所であり、あえて推読したものは(一)にかと傍記した。
- 六、本書所収の発句付句で他書に所出するものは、漢字と仮名の相違を除いて校異を巻末に注記した。その場合『豊西俳諧古哲伝草稿』↓(豊)、『龜山鈔』↓(龜)、『見聞集』(大阪市大 森文庫)↓(見)のごとき略号を用いた。
- 七、翻刻原稿の礎稿は井上が作製し、注記等は大内が施した。

〔西国追善集〕

秋寒し

反古

かつきて

鳴寐入

元祿八亥季

季秋上浣

1:オ

歴代の祖師の(マ、)末期とて聞に
去ると來るとのふたつに留つて
多クは空見にしつむのミあり

予大道廓然

白々として來ねは

又去る所なし

和

生るゝと思ハねは又死ると(カ)

いふへきいつの月も(見)

落安舎西國四十九末期(マ、)

白杵賢殿の尋ね侍りて

山にうたれては一氣の霜もなかりけり

西

一機頓發空諸有

大雅松風無此声

山菴老頭陀

賢殿書

1:ウ

2:オ

山家題

雲水に身をまかせ逆に流とりて廣瀨の水上

に遊ぶ松声おのつから真栢の妙なるを諷ひ岩も

る寛の雫自然木魚の響をなす心なきもの

方便の波間に一捧の竿を得て彼岸にいた

らすと云ふ事なし勅窓に集けるはひかし(一)

仙臺の藤の下西霜崎の松葉を分南は(一)

哥の濁男浪北は越のしら根か(た)カ(一)

基品幾そ唯あけても猶尊へし(一)

なせる業なるへし(一)

貞享五^戌辰のとし桂月十八日

耳に見て目に聞月の艶高し

飯時は子を呼にやる朝のほと

湯船をつなく川岸の隈

名月に下踏はく音の気疎きよ

うそ肌さむく髪の落ちる

朝貞の今朝姿見にはいまとひ

三味線かりにやるもかねこと

吞中の味くらからぬ夜の水

爰に手を打 國のおたやか

大釜の御湯に威を洗ふ神の庭

鳥蹴て行 やねの庭鳥

西行の目にか、りたる軒の松

けふも遊女の名のミ古市

同しさま筆帖か書も戀文

蠅追ふ隙にさむる夕めし

牛の子の荷を肩て行乳にすかり

自然と代々の富をいふ哥

人の欲忘る、ための秋の月

十日まで嘸く酒瓶の菊

奥を略

尺 卍

未 卍

乙州 卍

其角 卍

沾 卍

沾 卍

西國 卍

露 卍

尺(卍)カ

沾(卍)カ

其角(卍)カ

桃(隣)カ

沾(卍)カ

乙州 卍

沾 卍

未 卍

露 卍

落安舎

西國 卍

露 卍

沾 卍

未 卍

遠水 卍

沾(卍)カ

江戸興行

我としやけふも無事にて春の雨

不斷目ゆかし花園を湖

卷せぬる亭の蔭の戸霜替て

初に燕の巢をかけにけり

3・ウ

霜踏やいつか二階の書の面

春まで遅し極月の毒

鳥の寐る松ともいはす賣に出て

見渡す里に 小名分るなり

有明も石も流る、水のおと

筏に煮る茶 た、秋の風

西國 卍

露 卍

沾 卍

未 卍

遠水 卍

沾(卍)カ

5・オ

西

3・オ

2・ウ

荷ふ身は稲にかくれて駭行²³
 案してつきぬ繪簾の中
 浴する肌芳し^(マ) 薄ころも
 暮は遊女の喜怒起りけり
 此おもひ捨なは年の若く經ぬ
 火燵蒲團のかふるうた、ね
 嵐山を尽す屏風に立合せ
 汁を鏡にむかふ飯臺
 棚拜む手の外とてもあらざれば
 朝月涼し しめす姿の火
 花の後山地にくさき鹿の皮
 餅の黴ほす春もすくなき
 居間の外籬の道具の置所
 膝借る品の枕しらまし
 いとはれて胸打怱る小夜姿
 讀さす經になミタ降つく
 酒のかん幾度なをす主の前
 疊まで照る旅の夕月
 ものとらん露にさくりにて國の山
 霧にかハかぬ 網の浮繩
 解殘す船の形のあはれ也
 泥ふりおとす鷺の口箸
 枝城は何を移して鼠壁
 思ふにやすし土手道の闇
 占て見るも心のあて所

執筆 5・ウ
 西國
 露(一)
 沾徳
 未陌
 遠水
 沾荷
 未陌
 西國
 露沾 6・オ
 沾徳
 沾荷
 遠水
 西國
 露沾
 沾(徳)カ
 未陌 6・ウ
 沾(カ)
 西(國)
 露沾
 沾徳
 遠水
 沾可
 西國
 未陌 7・オ

死までためし盃の塵
 東屋の代々に威を添ふ花の愛
 母を慰む芹の見事さ
 ほとぬるむ沢邊の水艶つよく
 雉子の雌の知る、あし跡
 後の名月よする^(マ)
 小夜畑月の艶ひく男あり
 去る御方望まかせ
 即興
 やさ月の蔭袖てる影も哉
 右同し
 榮なん枕雪なす玉の庭
 御威光にひかれて
 來る事三百里初て
 とし越ければ
 千代御池ひと夜ふりにし月初²⁴
 元録によせ去る²⁵
 公を賀奉りて²⁶
 元の禄にもとり數ませ御門松
 正月九日西國剃髮し
 けるに
 日の出て頭の霞はれにけり^{アタマ}
 隅田川梅若の暮を見て²⁷
 其魂や今に柳の糸に讀ム²⁸

沾徳
 露沾
 沾可
 西國
 遠水
 7・ウ
 西
 8・オ
 8・ウ

【福か岡にて敬吟】

おほく八名のミ残りて哀におかし
土ものいハねはむかしを問へき便も

なし爰に福か岡の廣前二
柱の粧ひあさやかなれば

色垣や朱あまに古今の夏もなし

9・オ

9・ウ

東武より歸郷の砌蔦の黄はミ
て老木のすねたるハなとたは
ふれ 即興

西

ねち替て柳を蔦の巻れけり
霧踏む裳 吸からに焼
幾畔か案子に緩風落て
更て八月の影ほそふ照
さし寄て岸に謂云ふ水瓜船
覺の繩の結目をとく

10・オ

余所の榴鏝に馴て闖飛
駕にゆすられ音からは夢
茶は釜には和の西湖汲紫や町
戀よ千品の謎にこまらぬ
跡式の公事に取る、山境
今日は片手に祭る瘦神
醜覺できろりと琳し土手の原

10・ウ

掛羅をつらぬく浮草の障
婦つとはす顔妹は姉の笠を借り

誰かよふ書やおもひり
峯に漸花にもつれて月遅し
梟羽吹梅の香の窓

世の春を廣ふ見置て五十已後
野郎に出合ためのもミ裏
ふすへられ文枕までも中宿に

11・オ

心ふたつの早鐘の聲
茶違ふ園によるく血の姿
夕程ふる蟬の月代

秋の吟硯の石もくほふなる

山冷やかにとし寄ぬ里
暮の市肩に根引の松を賣ル

近きを種に直す水道
なき魂のためにとてなす酒施行
十は十國の沙汰を居ながら

11・ウ

いつか持替石筆も粉にくたけ
手と身とに巻 蔣の片袖

木刀に願ひを懲す垢離の水
天行鳥の跡の砂眞形

邑を避所見立て花に暮
霜は四方の靜なる精

12・オ

同じ国ならひ肥陽に趣

阿蘇のけふりをみて

山峯(マタ)て直きけふりのはしら哉

同し城下にして

是や爰歩に染ぬ雪の路

西

龍田山泰勝寺住持に對し
いふ事も打忘れけり庭の松
同前慈眼庵にして

12・ウ

物有て物なし空中に春
を煩し(マ)残れの雪分て宝富におかし

14・オ

去る人の下屋敷にて獨吟の

一卷を興し庭中廣太(マ)にして

龜井川といふ流を開入景を異
によする

門に残る雪の釣さま奥ゆかし

萩に月の晝たるに讚す

人は色にふけり艶に化て其光の本
をしらすかくいふてあたるへきにあらされとも

13・オ

唯座興にハしかし

14・ウ

機の外や雪は借らねと庭の面

禪法を好ける人のかり
尋ねて

世をくへて霜に手あふる庵かな

有人布袋の愚畫を

望 自讚をこへれしに

すへり行は何人の雪こかし

本妙寺に詣侍りて

清政(マ)菩提所なれば

鐘朽す響に寒し鬼しやくわん

名にいふ白川の邊蓮臺

寺に詣 ひかきの石の塔を見て

沢は石に岸にとけてや落こほり

13・ウ

花は四方何を覺に西に行

或人布袋大黒の相撲

戒行の望畫出し侍る

是そ賣の遯適の出合福力神力の悟道

の力をくらへてめてたき事には大なけ黄かけ

15・オ

白重をひつかけそり命永かれとて肩すかし
 腹すかし一方は打出の小槌の自由を働キ片く
 は天地の袋の緒をしめかけ互に無紙の笑顔
 動けは神風となる大極の圓を持日の出に
 向ふ西の宮打續難波入江のよしあしをいはぬこ
 そいみしき寄合柱文爰に筆折て畫けにいや
 くと讚なん外なし
 我よかし花引結ふ依際

野等に樂マてかくこそ

わりなきはふところ飯の霜かな

頬白囀る空の下陰

そよき來る東風にあくたをはらわせて

畫 讀

昼見れば螢は徒のむしそかし

片足は賤に忘し 涼ミ床

寸頭て來る人も有 五月雨

坂もかなほのく明の雲の峯

(余 白)

追善 次第不同

土用干書に残りたる噂かな

轉ひけり人涼ませし根木なるに

空疎の此善なからなみたかな

15・ウ

16・オ

西國

肥後熊本
多平次

西國

16・ウ

生る、も死るも同しす、みかな

夏の風灯消し 別かな

身の露の盈れて浮ふ蓮葉哉

紫の空や見上る雲の峯

殘されし詞にけふや汗泪

世の暑氣を独笑はん死手の旅

花なれや真に若葉の実となりて

白蓮の泥には染ぬあらしかな

夜念佛や米參らせて涼ミ床

かたひらの泪しミけり一七日

逸雪

國久

一幽

笑水

18・オ

齋淵

宗之

胤子

徳右衛門

露洗

公(一)
18・ウ

19・ウ

しれぬは人上秋さへ越ぬ身(カ)

追善の志を述し兄咏水こそ口(一)

泪にしめす筆先もふるひて爰にし(一)

來て西國と戯られしも今はむかし

と云ハ、眞珠の曇りとやならん口を

閉て居るも居られす袖行池水に身

をひたして

蓮の吟つい打いふて叩かれん

百ヶ日を吊歌仙

おもひ出す夜伽の汗をけふの露

飛羽のよハる飛風の蝶

夕月の木間除は氣ののひて

亡人 咏水

19・オ

田間氏 鷓立

素人 座花

水我

略ス

里隔漸秋風の告れは

膝すりしむかしおもへは袖の露

うへ替し木実拾はん西の山

其魂の在あたり敷雲の峯

涼む氣の徒事歎師の別

短夜も寐いらぬ程のなみたかな

朶采ぬる名は人並の夕す、み

蠅と蚊のせかみものかな忌の中

夏菊やひとり呼に持持佛堂

手のはらに余ル泪や汗のこひ

さひしさや増る憐の床す、み

居なからのせめては蓮か線香よ

四十九や浮世の清水未四五年

腹ほふて手あしもたるき涼ミ哉

注

1 (豊)に「元禄五年二月十九日 又下野侯へ召れて御会」。

2 (豊)(亀)に「大津尼知月」。

3 (豊)(亀)に「花園の湖」。

4 (豊)「露沾公」。(亀)「露沾君」。

5 (豊)に「霞ひて」。(亀)に「霞て」。

6 (豊)(亀)「沾荷」。

7 (亀)「うす肌寒く」。

8 (亀)に「這ひか、り」。

9 (豊)「三絃」。(亀)「三弦」。

莠()
() 19・ウ
筑州()
團()

荷國

番國

桜國

国介

西木

望雪

鷓吟

國迄

永國

20・ウ

10 (豊)に「添ふ」。

11 (豊)に「馬蹴て」。

12 (豊)に作者名「岬」。

13 (豊)に「蓬」。

14 (豊)に「今も」。

15 (豊)に「恋の文」。

16 (豊)に「隣」。

17 (豊)に「荷」。

18 (豊)に「同年十二月九日内藤下野守様にて、いまだ御目見へ仕らざりければと前書あり。(亀)に「或日露沾君にめされていまた御見え仕ざりければと有て」とある。

19 (豊)に「露沾公」。

20 (亀)に「賣に来て」。

21 (豊)に「村に」。

22 (豊)に「沾荷」。

23 (豊)は「下略」として以下なし。

24 (見)に「歳旦 松葉軒中村ト幽西國」とし下五「日の初」とある。

25 (見)に「元禄によせて君を賀し奉る敬作」と前書して見ゆ。

26 (豊)に「元禄五年正月九日落髮、此折ははや町宅也」とし、中七「天窓の霞」とする。

27 (豊)に「同三月十五日 梅若塚にて」と前書する。

28 (豊)に「糸による」。